

## 堅田氏家来と鋭武隊について

會員 佐伯 隆

### はじめに

萩藩寄組の堅田氏は寛永二（一六二五）年、都濃宰判戸田・湯野村を拝領し、以後、明治廢藩までの約二五〇年間、両村の領主であった。堅田氏は当役、当職など、藩の大役を歴任する一方、給領地には家来の大半を住ませ（註①）、領内の支配を行った。

嘉永四（一八五二）年、堅田安房が二四歳で亡くなったため、寄組高洲平七の五男で、国司信濃の実弟である健助（後の少輔）を養子とした。健助は僅か一歳で家督を相続した。このとき養祖父の堅田駿河は四一歳で、家中においては「大旦那様」とか「御祖父様」と呼ばれたようである。駿河は文久三（一八六三）年、

五三歳で亡くなった。翌年には京師変動（禁門の変）が起こり、以後、長州藩にとって激動の時代となる。この状況の下、慶応元（一八六五）年、健助は一五歳にして八幡隊（後の鋭武隊）の総管になる。

小稿では堅田氏の家中に注目し、萩から遠く離れた戸田・湯野村に住む陪臣（萩藩士の家来）がどのような幕末維新戦へ関わっていったのかを見ていきたい。これまで諸隊、特に奇兵隊の研究から、多くの陪臣が幕末に活躍したことが指摘されてきた。しかし、隊を構成する人に関わる研究は、隊の変遷や個々の隊士の立場を踏まえて論ずべきものであると考える。この試みを、鋭武隊をモデルとして論じてみたい。

一、松下村塾と堅田氏家来 (安政五年)

堅田氏の家来が松下村塾に出入りしていたことは、よく知られている。『吉田松陰全集』(註②)には、松陰が再入獄される直前の安政五(一八五八)年八月に、河内紀令(家老)、田坂茂人(家老)、中村多三郎(家老)、竹下琢磨、竹下幸吉、下川某、といった堅田氏の家来の名前が見える。また『竹下琢磨の邑に帰るを送る紋』には、

「琢磨は戸田の邑人なり。是れより先き同邑の士二十余名と松下塾に來り、銃陣を演習す。」

とあり、家来が集団で出入りしていたことが判る。

二、尚義隊 (文久三年〜元治元年)

『湯野・戸田郷土名士小伝』(註③)には堅田氏の家来の「坂田晋作」という者について、

「文久三年撰バレテ尚義場主簿ト為リ、」

とあり、「尚義隊」という幕末諸隊の書記であったことが書かれている。また坂田晋作の手による『元治元

年 長藩尚義隊 當中録事』なる文書も残されている

(註④)。これによれば、尚義隊の総督は毛利信次郎(註⑤)であり、御手元有福半右衛門、手附藤井弥十兵衛に続いて、三五名の隊士の名前、及び、五卿(三条、三条西、四条、東久世、壬生)の名前が記されている。『防長回天史』には「尚義隊」という隊が見え、

「又尚義場と稱し山口に在り。平時は諸大夫其家臣の少壮俊秀の者を率いて此に會し文武を講究し、出でて即ち戦う故に隊名あり。政府之れを明倫館の支校と爲し、十人の学資を給し、其余は之れを自弁せしむ」

とある(註⑥)。即ち、藩からいわば奨学金を貰いながら山口明倫館で学ぶ優秀な陪臣が、有事に編成するのが尚義隊である。この隊は元治元(一八六四)年に何度か動いている。七月一四日、藩主毛利敬親の世子(定廣、後の元徳)は八月一八日の政変(文久三年)

で朝敵となった長州藩の嘆願のため、五卿を伴って三田尻より海路、京都に向かう。『もりのしげり』は、

「世子定廣十四日三田尻ヲ發艦清末侯ヲ先鋒二陣トシ浦滋之助ヲ斥候備トシ毛利宣次郎ヲ前備トシ中軍ハ世子之ヲ総ヘ五卿之二伴フ而シテ吉川監物ヲ殿備トス二十日京都ノ變報ヲ得テ多度津ヨリ船ヲ班シ二十三日上関ニ著シ二十六日三田尻ニ帰ル」

と記している。ここで、前備の毛利宣次郎が率いた隊が尚義隊である。京都に向かったものの、福原、益田、国司軍の敗退（禁門の変）を多度津（現在の香川県多度津町）で知り、三田尻に引き返したのである。この頃、堅田家中の日記である『日乗』（註⑦）には、

「元治元年七月八日 晴天

一、河内潤藏、田坂庸、生瀬清見、竹下弥三郎、

井上孫三郎、藏田武熊、坂田晋作

右此度 御上京ニ付

公卿方御警衛として御供ニ被召加被差越候事

右之通ニ諸家様一紙ニ尚義隊江只今

御沙汰相成候事

尤都合ニ拾六人之事

右之通り山口より継送りニ申越候事

一、尚義場より坂田晋作罷帰候事

一、今日河内潤藏、田坂庸、生瀬清見、竹下弥三郎、藏田武熊、坂田晋作

右格紙を以御沙汰相成候事

とあり、堅田氏の家来が五卿の護衛として世子の御供に加えられたことが判る。三五人の陪臣隊士の内、堅田氏の家来が七人を占めていることに注目したい。

### 三、奇兵隊への脱走入隊（元治元々二年）

京師変動の後、長州藩は江戸、京都、大阪の藩邸を没収され、八月一日は征長幕令が発せられる。さらに同五、六日には四カ国外艦が馬関を砲撃する。このような情勢の中、藩内は幕府に恭順の意を示そうとする俗論党が台頭する。松下村塾で銃陣演習をしたように、士気の上がつっていた堅田家中の面々が、この時期、どのような日々を送っていたのであろうか？ 『日乗』によれば、この時期、堅田健助は在郷（湯野村）して

いたようであるが、意外にも切迫したものが感じられない。例えば四力国外艦が馬関を砲撃した八月五日の記載として、

「一 馬関ニおゐて変動之様子御座候事」

とある。主だった事件は伝えられたようで、その都度、家来が萩や山口、須佐などに足を運んでいるが、健助自身が動いたのは徳地への巡見のみである。ところが、当時の家来の胸中を窺い知るような事件が発生する。

二月一六日、高杉晋作は功山寺で決起し、転戦北上する（長州内訌戦）。奇兵隊もこれに加わり、美祢伊佐村に陣を進めた。二月二三日の『奇兵隊日記』には、

「戸田藩臣福永得三福永元之祐瀧山克巳村橋牧太脱走入隊願出候ニ付槍隊ニ留置候事」

とある。福永姓の二人は家老福永孚の嫡男と三男で、瀧山と村橋は中堅核の家来である。『堅田健助日記』

（註⑧）には、二ヶ月後の元治二年二月一日に、

「一 福永得三同元之祐瀧山克巳村橋牧太先達而より脱走いたし居候処ニ此度ひ之時勢ニて彼之

四人之者へ御同事御免被仰出候而御目通り被仰付候事」

とあり、脱走行為は許されている。彼らは自らの意志で領内（戸田・湯野村）を抜け出し、奇兵隊への入隊を願い出たのである。彼らにこのような行動を起こさせしめたものとは、何だったのであろうか？

四、堅田健助と八幡隊（慶応元年）

八幡隊は奇兵隊と同時期の文久三（一八六三）年一月に藩士（三十人通）堀真五郎が創設した。長州内訌戦の後、藩の正規軍となり、慶応元（一八六五）年五月一四日、堅田健助が総管を命ぜられる。八幡隊は定員を二〇〇名とし、小郡（註⑨）を屯所とした。堅田氏の家来、戸沢九十九の『年代略記』（註⑩）には、

「慶応元年五月廿一日ヨリ秋穂浦八幡隊入隊御供ニテ六月迄出張」

とあり、家来も屯所に出張したことが判る。

## 五、南第五大隊 (慶応元々二年)

健助が八幡隊総管となつて約五ヶ月後、藩では軍制改革がなされ、千石以上の藩士はそれぞれの家来を兵士とした、いわゆる「陪臣隊」を編成することになる。これには南第一大隊から十五大隊まで、及び北第一大隊から北第六大隊まであり、一大隊は八小隊からなり、一小隊は三七名となっている。堅田氏の家来は四小隊一四九人を抛出し、毛利筑前(右田毛利氏)の半大隊と共に南第五大隊を編成する。堅田健助隊の内訳は、

### 一 堅田健助

#### 一 銃隊半大隊

内

一小隊 士分持筒装條銃

一小隊 足軽中間之間持筒尋常銃

二小隊 農兵持筒同断

右人数百四拾九人

但士官銃卒兵

とあり(註⑩)、領内の農兵も巻き込んだ総動員であった。装備も大砲や銃による西洋式なものであったこ

とが窺い知れる。ここで『八幡隊総管で、且つ、南第五大隊の堅田健助隊の長である堅田氏』の家来の立場はどのようなものであつたろうか？ これは四境戦争での隊の動きから判る。慶応二(一八六六)年、健助率いる兵は芸州口の戦に加わるため、山代宰判の亀尾川に向かったが、到着した時には戦いは終結していたため、直ぐに引き返し、小倉口の戦に加わった。そして十月四日の戦局について次のようにある(註⑫)。

「十月四日惣明我兵豊後橋ニ會シ八幡隊三番小隊堅田少輔二番小隊ハ筑前口清水ニ備ヘ粟屋帯刀二番小隊ハ豊後橋ヲ守リ八幡一番鴻城一番五番堅田一番四小隊ハ篠崎口ヨリ進ミ八幡二番鴻城二番堅田三番粟屋一番四小隊ハ蒲生川ヨリ進ミ木舟ノ森ヨリ二手ニ分レ八幡鴻城二小隊ハ宮尾八幡山ニ進攻ス敵兵既ニ走ル依テ蒲生川ノ南ヲ進行ス堅田粟屋二隊ハ東川堤ヲ進ム篠崎口ノ手宮尾ヲ経テ分レ鴻城一番ハ山道ヲ進ミ堅田一番ハ戸ノ蔵山上ノ敵ヲ追ヒ本道ト並ヒ進テ今村砲台ニ薄攻ス・・・」

これより、八幡隊と堅田少輔隊は全く別物として扱われている。主人は八幡隊の総管になったが家来は堅田氏の家来として戦ったのである。前出の『年代略記』にも、

「九十九儀五月ヨリ旧君（健助）御供ニテ秋穂出陣  
八月山代亀尾川出張、直様馬関口へ出、九月廿八  
日豊前小倉渡海諸所合戦」

と、「御供」の立場をとっている。小倉戦で家来二人（井上収蔵、山田庫二郎）が戦死するが、賞典関係の文書には「八幡隊士」との記載はない（註⑬）。また農兵（西郷甚八、西郷三吉）もこの戦で亡くなるが、二人に対する恩賞は堅田家中でなされたのであろうか、『萩藩殉難者名簿』などの萩藩（毛利家）によって作成された維新関係者名簿に名前が出てこない（註⑭）。

## 六、鋭武隊（慶応三年〜明治元年）

慶応三（一八六七）年二月、八幡隊は集義隊と合併して鋭武隊となる。総管は堅田健助である。同年三月、

健助は山陽道出兵総督を仰せ付かり、鋭武隊（三三五名）、整武隊（四〇〇名）、第一大隊の二中隊（二〇〇名）、第四大隊の二中隊（二〇〇名）、第一砲隊の半砲隊（四〇人）、及び第三砲隊（八〇人）の計一四四五名（註⑮）を率いて三田尻を発す。芸州尾ノ道に上陸し、明治元（一八六八）年、備後福山藩を降伏させ、備前片山港より作州津山、播州姫路の諸藩を降伏させ、さらに四国松山城を開城させる。

一方、堅田氏の家来は三五人が鋭武隊に「入隊」している。この点は隊と別扱いの集団として存在した八幡隊の時と異なるが、この内、福永次郎、石田孫二郎を除く三三人は「鋭武七番銃隊」（註⑯）の中におり、田坂耕造（註⑰）がその半隊司令になっている。表1は明治元年における三三人の参戦を示したものであるが、福山藩を降伏させた後、堅田氏とは別行動となり、江戸上野で幕府軍（彰義隊）と戦う。この際、元尚義隊士の生瀬清見を始め、四人が戦死した。そして江戸近郊で小競り合いの後、品川で英艦に乗り、常州平潟

表1 鋭武隊における堅田氏家来の動き（『鋭武隊戦功録』毛利家文庫、諸隊五六より作成）

氏名	身分	明治元年	1/9	閏4/7	5/15	5/26	7/26	7/28	7/29	8/1	8/11	8/20
		年齢	福山	姉崎	上野	小田原	広野村	新田原	野上村	波江宿	駒ヶ峰	駒ヶ峰
田坂 耕造	家老 本人	31	○	○	○	○	○	○	右足傷			
足達 勘太郎	大組士 本人	23	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下川 益人	大組士 本人	31	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
戸沢 九十九	大組士 本人	36	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
山縣 小祐	大組士 本人	26	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
田嶋 近之進	大組士 本人	23	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
三好 竹之進	大組士 弟	26	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
福田 謙吉	大組士 弟	22	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
林 弥太郎	大組士 本人	30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
田中 光蔵	大組士 本人	25	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
吉田 為之助	大組士 嫡男	25	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
中村 祥助	大組士 弟	19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
福永 登一	大組士 嫡男	17	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
河村 市之介	大組士 本人	24	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
新庄 安太郎	大組士 嫡男	17	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
西川 園吉	大組士 本人	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
瀧山 直蔵	大組士 嫡男	18	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
山本 光蔵	大組士 本人	23	○	○	○	○	○	左股傷				
大谷 武太郎	大組士 嫡男	17	○	○	○	○	左股傷					
福永 三男	家老 三男	21	○	○	○	○	○	○	○	○	○	左右膝傷
瀧原 鍊造	大組士 嫡男	22	○	○	○	○	○	○	○	○	首右側傷	
蔵田 武熊	大組士 嫡男	24	○	右足傷								
長井 虎熊	大組士 本人	31	○	○	右股傷							
生瀧 清見	大組士 本人	33	○	○	戦死							
池永 小五郎	大組士 弟	23/25	○	○	戦死							
原 虎之介	大組士 本人	26/27	○	○	戦死							
久山 寿之進	大組士 嫡男	22	○	○	戦死							
榎木 直人	大組士 嫡男	22	○	○	重傷 5/27死							
弘中 精輔	大組士 嫡男	31	○	○	○	○	○	○	○	○	○	戦死
高橋 市郎	大組士 嫡男	26	○	○	○	○	○	○	○	○	○	重傷 9/23死
西郷 小源	大組士 下 嫡男	32/33	○	○	○	○	○	○	○	○	○	重傷 9/28死
井上 四郎	大組士 嫡男	19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	重傷 9/22死
西郷 吉甫	大組士 嫡男	26	○	○	○	○	○	○	○	○	○	重傷 9/4死



写真1 戸田桜田神社参道に立つ戊辰戦争凱旋碑。23人の名前が見える。

まで移動、陸路を北上する。相馬を拠点とし、仙台藩と駒ヶ峰（現在の福島県駒ヶ嶺）で二度の激戦となり、七人が死傷した。十月一五日に帰国命令となり、二三人が凱旋したのである。

## 七、鋭武隊士の構成

小林茂氏は奇兵隊士の構成を分析し、『郷土』において次のように論じている（註⑰）。

「へ前略」そしていわれるように、軽卒の者が多く、これに陪臣が圧倒的である。へ中略このことは逆に、軽卒の士として伝統的な正規軍では十分に力量を発揮し得にくかった連中が入隊したことを示し、その意気の高揚が奇兵隊を通して藩政を次第にリードしてゆき、やがて倒幕にもちこんでいった原動力になったものと思われる。「この記述は、奇兵隊は農兵隊のような印象があるが、実は隊士の半数は士分で、そのまた半数は陪臣であつたとの分析結果から導かれたのである。では鋭武隊はどうだろうか？ 隊士については『毛利家文庫』の複数の文書で知ることができる（註⑱）。これらの文書を元に藩士、陪臣、農民などに分類して図1に示した。これより、鋭武隊も奇兵隊と同じ傾向のように見える。しかし筆者はこの分類作業で非常に迷ったことがある。「藩士の階級で『中間』の下位で

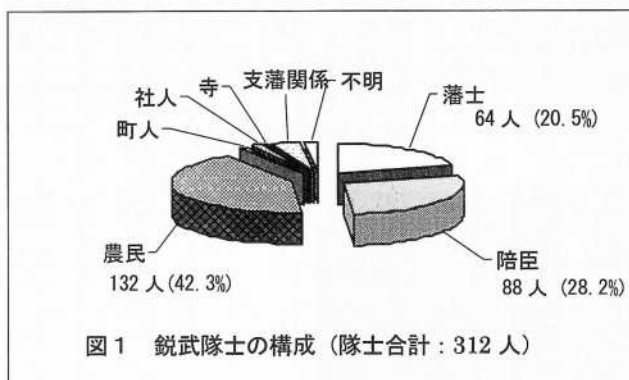


図1 鋭武隊士の構成 (隊士合計：312人)

ることにする。まず農民について、「倅」という表現は明確とはいえないが、いたし方ない。これを無視して結果を見ると、一人として当主や嫡男はいない。こ

ある『新六尺』は藩士に分類するか？ さらに新六尺の倅（せがれ）は藩士か？「また「社人の次男も社人に分類するか？」などである。つまり図1のような大きくりの分類は、その作業をしてみると、無理があることに気づく。そこで表2のように個別に分類を見







写真2 堅田駿河肖像  
(個人所蔵)

加えられたり、家来と領内の農民で半大隊を形成し、小倉口の戦に加わった。これは禄高六一二六石の大名としてのノルマもあつたであろう。この頃の家来の行動が主人の意志を反映したものとすると、それは幼い健助ではなく、駿河の指示ということになる。堅田駿河は徳山毛利八代の広鎮の子であるが、その実弟の一人は九代毛利元蕃、また京師変動に参戦した福原越後、さらに萩藩主毛利敬親の養子となつた元徳、という立場から察するに、「俗論党」的な人ではありえない。

ところでこれより数年前、家老三人を含む堅田氏の家来が松下村塾に出入りしていたことは、主人の意に沿つたものだったのだろうか。桂高杉、伊藤らのような幕末の志士が持つ

ていた日本に対する危機感のようなものを、堅田氏の家来も感じていたというのであろうか？

「侍になれる」と入隊した農民が、明治に脱隊騒動を起した悲劇は良く知られている。しかし、そのことを陪臣にダブらせてはいけない。確かに陪臣の身分は藩士の次に班つ（わかつ）ものであつたが、その秩序をひっくり返そうとは微塵も思つていなかったと考える。幕末維新戦で陪臣の活躍が際立つて見えるのは、本来、陪臣は事有る時は主人のために戦う存在であるが故である。このような誤解が起ころのは、平時の陪臣の研究に、ほとんど手がつけられていないからであると思う次第である。

### 註

① 近世後期では家来の総数は約二〇〇人であり、内九割は戸田・湯野村に在住した。

② 『吉田松陰全集』（第一一巻、一六七頁）、（第四卷、四一二頁）、（第四卷、四一三頁）

- ③ 個人所蔵。堅田氏の家来、吉田為之助の孫、為一（蘇水）が昭和三年に書いた。
- ④ 山口県文書館 戸田山田家文書（四〇〇）
- ⑤ 厚狭毛利九代房晃男。宣次郎、親民。
- ⑥ 『修訂防長回天史』第五編下（末松謙澄著、一九二二）六五六頁
- ⑦、⑧ 個人所蔵。
- ⑨ 『もりのしげり』による。屯所は吉敷郡秋穂町の正八幡宮の位置と推定される。近くに八幡隊の招魂社であった朝日山招魂社があり、入口の鳥居に「慶応三年丁卯四月吉日 堅田信義寄付」とある。
- ⑩ 堅田信義は健助（少輔）である。
- ⑩ 個人所蔵。毎年の出来事を記したものである。
- ⑪ 『千石以上諸家軍制録 慶応元年』 毛利家文庫（防寇九八）
- ⑫ 『忠節事蹟』毛利家文庫（藩臣二一 第五集 第一二一本）
- ⑬ 毛利家文庫（諸隊八九、一〇七、七七、賞典三一、八四、諸省四三五）
- ⑭ 西郷甚八の跡目である民吉と、西郷三吉の跡目である直吉は、堅田氏の家来（中間）として明治三年の分限帳に加えられている。湯野の後山招魂場には両名の神霊があり、『都濃郡史』（大正一三年都濃郡役所刊行）には関連の記載がある。
- ⑮ 毛利家文庫（諸隊九五、一〇七）
- ⑯ 松下村塾に入入りした田坂茂人と同一人物。廃藩後、戸田、湯野村の初代戸長となる。
- ⑰ 「奇兵隊の構成」（郷土第一二集、五五頁、下関郷土会刊、昭和四一年）
- ⑱ 毛利家文庫（諸隊五七、五八、五九、六〇）
- ⑲ 小林氏は『忠勇義烈 奇兵隊名鑑』の身分の記載で、「〇〇内」とあるものを「陪臣の本人」とさされているがこれは誤りである。毛利家文庫の『諸隊一件』や『賞典』には隊士の身分が名鑑より詳しく書かれている場合があり、これに該当する二〇名のうち、本人であるのは僅か二名であった。